

学部生の英語学習に関する実態調査

— 工学院大学の事例 —

山 田 朋 美

A Survey on English Learning of Students in Kogakuin University

YAMADA Tomomi

0. 概要

工学院大学の2年次の必修英語科目である Basic Academic English I の履修者を対象に英語学習に関する実態調査を行った。本学の学生の多くが、在学中に英語力を身につけたり、海外渡航してみたいと考えたりしているものの、それが英語学習という行動には結びついていないことが明らかになった。

1. はじめに

一般的に、日本において「理系」の学生は英語が苦手だと言われている。例えば、2018年度の TOEIC[®] Listening & Reading Test の結果を見ると、情報科学系、理・工・農学系専攻学生の平均スコアは、他の専攻の学生よりも低い¹。他方で、こうしたいわゆる「理系」の学問を専攻している学生が、卒業後に英語でのコミュニケーションが必要とされる仕事に就くことも少なくない。グローバル化の進展、また国際社会における日本のプレゼンスの低下に伴い、日本語を母語とする技術者が英語でのコミュニケーションを迫られる機会は今後さらに多くなることが見込まれる。しかしながら、このように英語の重要性がより高まる状況下で、工科大学である本学の学生の英語によるコミュニケーション能力は決して十分とはいえない。2020年12月に本学の1年生の必修科目である Basic English II の履修者を対象に実施された TOEIC-IP テスト（オンライン）の平均スコアは D レベルであった。アメリカの非営利テスト開発機関 ETS（Educational Testing Service）が行ったコミュニケーション能力と TOEIC スコアの相関についての調査結果に基づき作成された基準によると、このスコアは「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」、「相手が特別な配慮をしてくれる場合に

は、意思疎通ができる」レベルに相当する²。TOEIC スコアによって学生の英語コミュニケーション能力を全て測れるわけではないが、決して十分な力を持っているとはいえないのが現状である。そこで、本学の学生の英語によるコミュニケーション能力のさらなる向上を図ることを目的に、学生の英語に対する意識およびその学習実態を把握するためのアンケート調査を実施した。ここでは、2年次の必修科目である Basic Academic English I を履修している学生を対象に、工学院大学の学生の英語に対する意識およびその学習実態を報告する。

2. 調査方法

まず、調査の概要について述べる。本調査は、本学学部生の英語に対する意識および英語学習の実態を把握することを目的に Basic Academic English I の第12週目を実施された。調査方法は、Google Forms を用いたアンケートを実施した。Google Forms にアクセスするための URL は、本学の LMS で配布する授業資料に記載した。調査対象は、Basic Academic English I の履修者1464名（2年生1437名、3年生27名）とし、内944名（全体の約65%）からアンケートに回答があった。調査項目は24項目（選択式12問、自由回答式12問）の質問から構成され、自由記入欄についてはテキストマイニングソフト KH Coder による分析を加えた。なお、調査項目に関しては Appendix に掲載している。

3. アンケート結果分析

3-1. 本学学生の英語に対する「好き」「嫌い」の実態

アンケート回答者944名のうち、英語に対して好意的な意識（「好き」または「どちらかといえば好き」）を示した学生（以後「好き」グループ）と、否定的な意識（「嫌い」または「どちらかといえば嫌い」）を示した学生（以後「嫌い」グループ）の割合を図1に示す。「好き」グループの学生の割合は全体の約46%（432名）、それに対して「嫌い」グループは、全体の約54%（512名）であった。「嫌い」グループの割合がやや多いものの、本学においてはおよそ2分の1の学生が、英語に対し好意的な意識を持っていることがわかる。

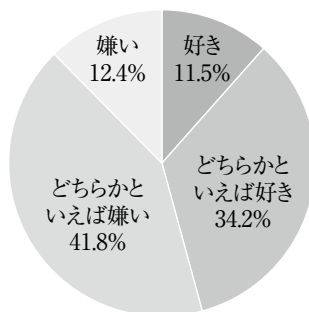


図1 英語の「好き」「嫌い」

3-2. 英語が「好き」な理由と「嫌い」な理由

回答者が英語が「好き」または「嫌い」な理由を明らかにするために、Google Forms に記入してもらった自由回答欄のデータに対して KH Coder によるテキストマイニングを行い、共起ネットワーク分析を行った。KH Coder とは、文章データを統計的に分析する計量的テキスト分析のために開発されたソフトウェアで、無料で公開されている³。この共起ネットワーク分析を行うことによって、語同士の結びつきを可視化することができる。

「好き」に関しては、420 名分のデータが得られた。そのデータの形態素解析を行ったところ、総抽出語数は 2346 語（異なり語数 515）であった。共起ネットワークを生成する上での最小出現数は「3」に設定した。

図 2 では、「好き」グループがその理由として挙げた語の共起ネットワークが示されている。「好き」グループからは、その理由として、「人」「コミュニケーション」「取れる」という語や、「見る」「映画」「洋画」「洋楽」という語が産出される傾向があり、学生が英語を人とのコミュニケーションや海外文化に触れるための手段と捉えていることが窺える。また、「日本語」「違う」「表現」「面白い」や、「新しい」「学ぶ」「言語」という語も産出されており、学生が外国語を学ぶ面白さを感じている可能性も見て取れる。中には「広げる」「視野」「知識」「通じる」「嬉しい」「聞き取れる」といった語も産出されており、英語学習によって自分自身の成長を感じられることが、英語に対して好意的な意識を持つことに繋がっていると思われる。

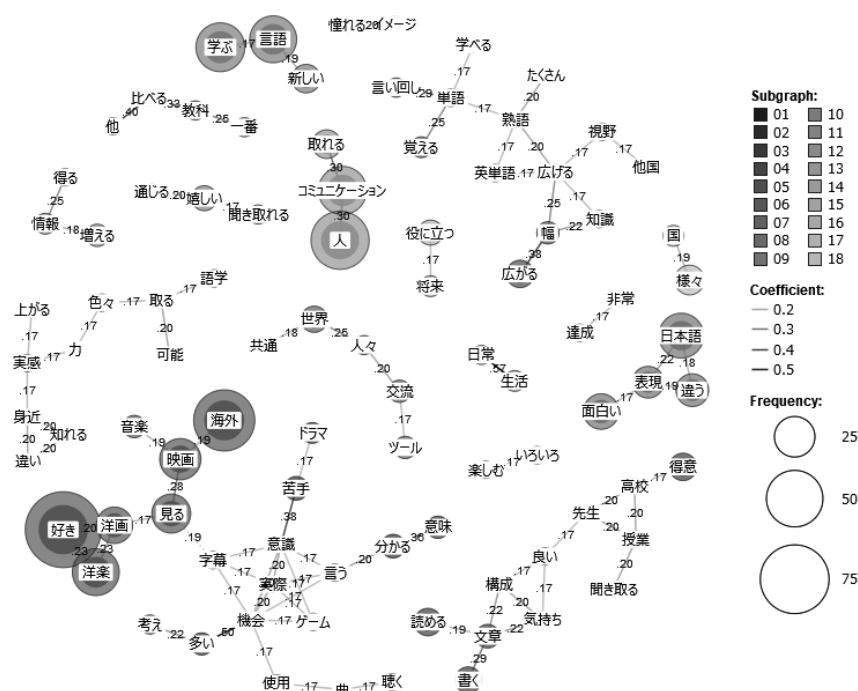


図 2 英語が好きな理由の共起ネットワーク

他方、「嫌い」に関しては、507 名分のデータが得られた。そのデータの形態素解析を行ったところ、総抽出語数は 2781 語（異なり語数 516）であった。共起ネットワークを生成する上での最小出現数は「3」に設定した。

図 3 では、「嫌い」グループがその理由として挙げた語の共起ネットワークが示されている。「嫌い」グループにおいては、その理由として、「覚える」「単語」「文法」「多い」といった語や、「中学」「高校」「授業」「成績」「伸びる」「良い」⁴といった語が産出される傾向がある。ここからは、学生が英語をコミュニケーションや異文化理解、自分を成長させるためのツールではなく、教室内で学ぶ「科目」としか認識していないことが窺われる。

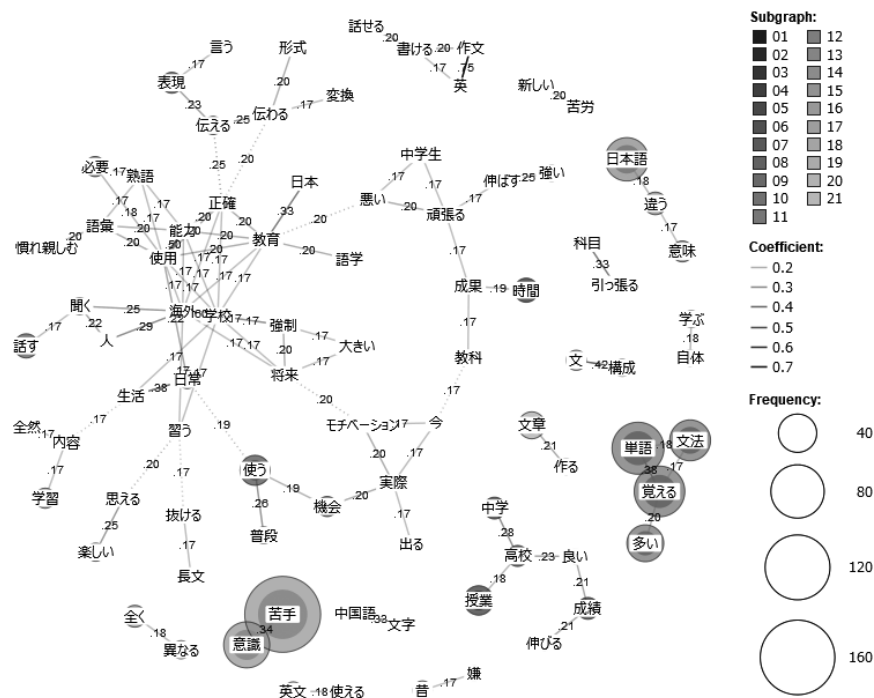


図 3 英語が「嫌い」な理由の共起ネットワーク

3-3. 得意な分野と苦手な分野

英語の 4 技能（「リーディング」「ライティング」「リスニング」「スピーキング」）について、学生が最も得意だと思う分野と、逆に最も苦手だと思う分野についてもアンケートを実施した。なお、得意か苦手かは学生の主観に基づくものである。

図 4 で示されているように学生が最も得意だと答えた分野は Reading で全体の 55%（519 名）を占めた。次いで多かったのが Listening で 22.8%（215 名）であった。それに対して、図 5 にあるように、学生たちが最も苦手だと答えた分野では Speaking が全体の 34.7%（328 名）を占め、次いで Listening が 29.1%（275 名）であった。ここからは、学生が情報のイ

ンプットに関わる分野に関しては得意であると認識している一方で、対面でのコミュニケーションに必要とされる分野に関しては苦手意識を抱いていることがわかる。

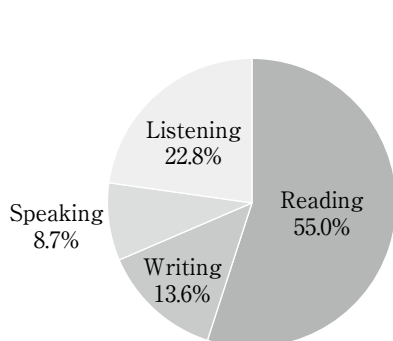


図4 英語の4技能のうち最も得意な分野

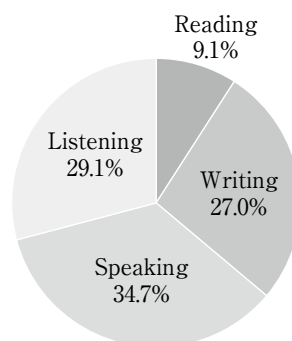


図5 英語の4技能のうち苦手な分野

さらに、このスキルと、英語に対する「好き」「嫌い」の間の関係を見る。図6および図7で示されているとおり、「好き」グループ、「嫌い」グループの学生の両方が、得意な分野として Reading を挙げている。その割合は、「好き」グループでは 55.1%（238 名）、「嫌い」グループでは 54.9%（281 名）であった。また、Reading に次ぐ得意分野として Listening が挙げられているのも全体の傾向と変わらない。「好き」グループでは 24.3%（105 名）、「嫌い」グループでは 21.5%（110 名）の学生が Listening が得意であると回答している。しかし、Speaking と Writing においては「好き」グループと「嫌い」グループの間に若干の差が見られた。「好き」グループでは、Speaking が得意だと答えた学生は 10.2%（44 名）、Writing が得意だと答えた学生は 10.4%（45 名）とその割合はほぼ同じであった。それに対し、「嫌い」グループの学生は 7.4%（38 名）の学生が Speaking が得意と答えた一方、Writing が得意だと答えた学生は 16.2%（83 名）であった。

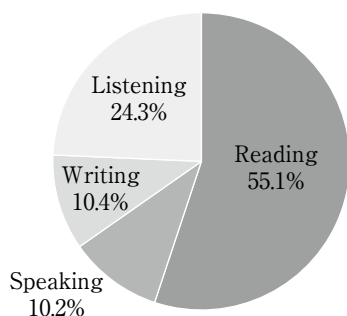


図6 「好き」グループの得意な分野

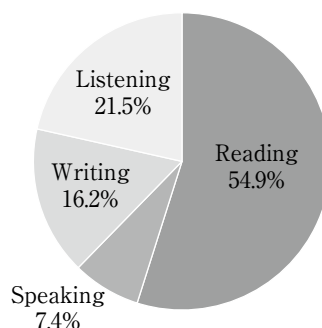


図7 「嫌い」グループの得意な分野

3-4. 海外への関心

外国語学習において、モチベーションが重要な働きをすることは一般的に認められている⁵。モチベーションには様々なものがあるが、その1つとして海外への関心を本学の学生がどのくらい持っているのか、また海外への関心と英語の「好き」「嫌い」には関係があるのかを示す。

まず、海外渡航経験の有無についてであるが、図8で示されているとおり、回答者の約半数である50.5%（477名）が「ある」と回答した。

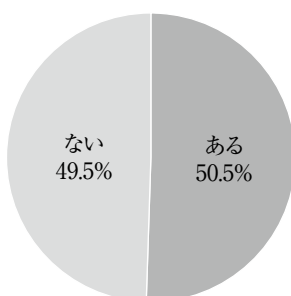


図8 海外渡航経験の有無

そして、海外渡航経験と英語に対する「好き」「嫌い」の関係を見ると、図9および図10で示されているとおり、「好き」グループの方が、海外渡航経験のある学生が多いことがわかる。「好き」グループの学生の中で海外渡航経験がある者は56.9%（246名）であるのに対し、「嫌い」グループの学生で海外渡航経験がある者は45.1%（231名）に留まっている。海外渡航経験があるから英語が好きなのか、英語が好きだから海外渡航経験があるのかはこの調査からは判断できないが、両者の間には多少の関係があることが窺われる。

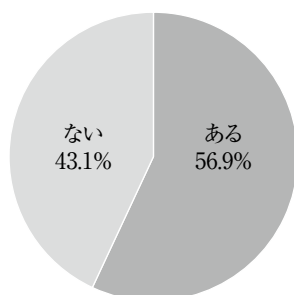


図9 「好き」グループの海外渡航経験

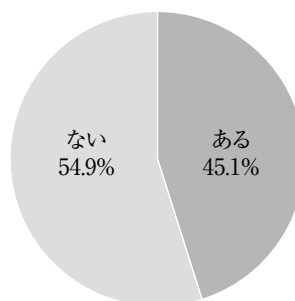


図10 「嫌い」グループの海外渡航経験

次に、在学中に海外に行きたいかという質問には、図 11 からわかるように 66.6%(629 名)の学生が「はい」と答えた。「COVID-19 の感染拡大が収まるなど環境が整えば」という条件付きではあるが、本学の学生の多くが海外に関心を持っていることがわかる。

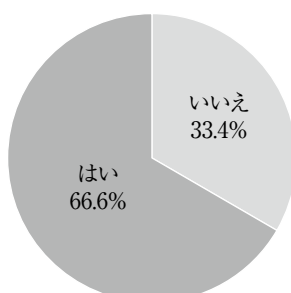


図 11 海外渡航の希望者

そして、この海外渡航への関心と、英語の「好き」「嫌い」の間には明確な関係があるように思われる。図 12 および図 13 からわかるように、「好き」グループは、実に 78% (337 名) が海外渡航を希望しており、それに対して「嫌い」グループで海外渡航を希望する学生は 57% (292 名) にとどまっている。

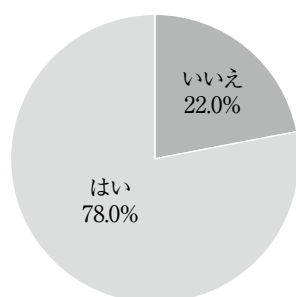


図 12 「好き」グループの海外渡航希望者

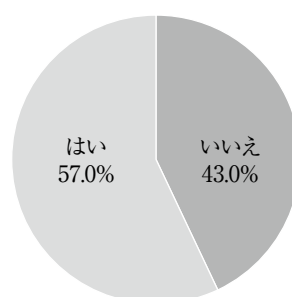


図 13 「嫌い」グループの海外渡航希望者

3-5. 英語学習に対する意欲

本学の学生の英語学習に対する意欲についてまとめる。図14からは、アンケート回答者の大多数が、英語学習の必要性を認識していることがわかる。回答者の88.6% (836名) が大学在学中に英語の力を伸ばしたいと回答している。ただし、図15と図16からわかるように、「好き」グループの方が、在学中に英語のスキルを伸ばすことに興味を持っている学生がより多いことがわかる。「好き」グループでは実に95.6% (413名) の学生が英語力を伸ばしたいと回答したのに対して、「嫌い」グループではその割合は82.6% (423名) であった。

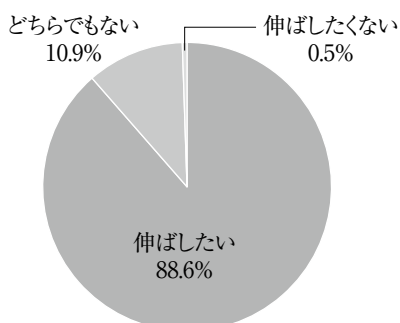


図14 英語力を伸ばすことへの関心

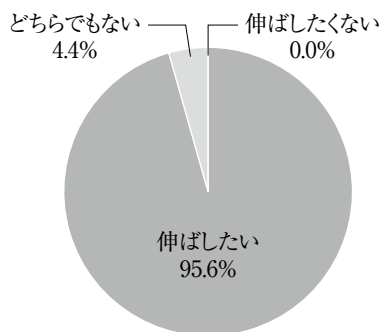


図15 「好き」グループの英語力を伸ばすことへの関心

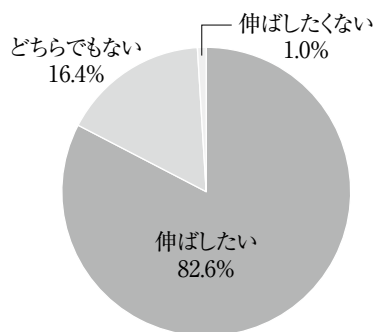


図16 「嫌い」グループの英語力を伸ばすことへの関心

なお、学生たちが在学中に伸ばしたいと思っている英語の分野は、図 17 で示されている通り Speaking が 40.9% (386 名) を占め、最も多かった。つまり Speaking は最も苦手な分野ではあるが、同時に最も習得したいと学生が考えている分野でもあることがわかる。

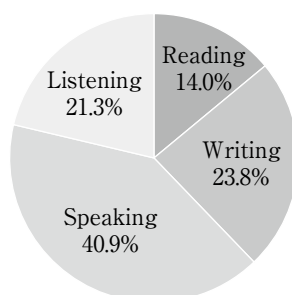


図 17 在学中に最も身につけたい分野

3-6. 実際の学習実態

アンケート回答者の多くが海外に関心を示し、また 9 割以上が在学中に英語の力を身につけたいと考えていることは明らかになったが、では実際本学の学生は普段どの程度英語に触れているのだろうか。実際の英語学習時間は図 18 の通りである。

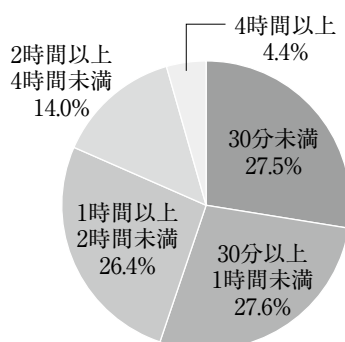


図 18 1週間あたりの英語に触れる時間（大学での授業時間は除く）

図 18 からは、全体の半数以上にあたる 55.1% (521 名) の学生が、週に 1 時間も英語に触れていないことがわかる。ただし、このことについては学生たちも十分に認識しており、図 19 で示す通り回答者の 62.2% (587 名) が、英語に触れる時間が十分に確保できていないと回答している。

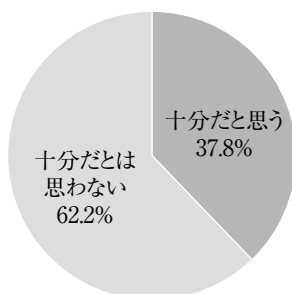


図 19 1 週間あたりの英語に触れる時間への自己評価

それでは、学生の英語学習を妨げているものはなんなのであろうか。1 週間あたりの英語に触れる時間を十分だとは思わないと回答した 587 件を分析対象にし、その理由について、KH Coder によるテキストマイニングを行ったところ、559 名分のデータが得られた。そのデータの形態素解析を行ったところ、総抽出語数 3256 語（異なり語数 510）であった。共起ネットワークを生成する上での最小出現数は「5」に設定した。

図 20 では、1 週間あたりの英語に触れる時間が「十分だとは思わない」と回答した学生が挙げた語の共起ネットワークが示されている。「課題」「授業」「忙しい」「時間」、「時間」「確保」「難しい」という語が多く産出され、かつ結びつきの強さも確認された。ここからは、他の授業の準備に追われ英語に十分な学習時間を割くことのできない学生の状況が窺われる。また、「優先」「順位」「低い」や、「苦手」「意識」「避ける」といった語も産出されており、英語学習に対して十分なモチベーションがない、または英語に対して否定的な意識があるため、英語に触れることを避けている学生も一定数いると思われる。

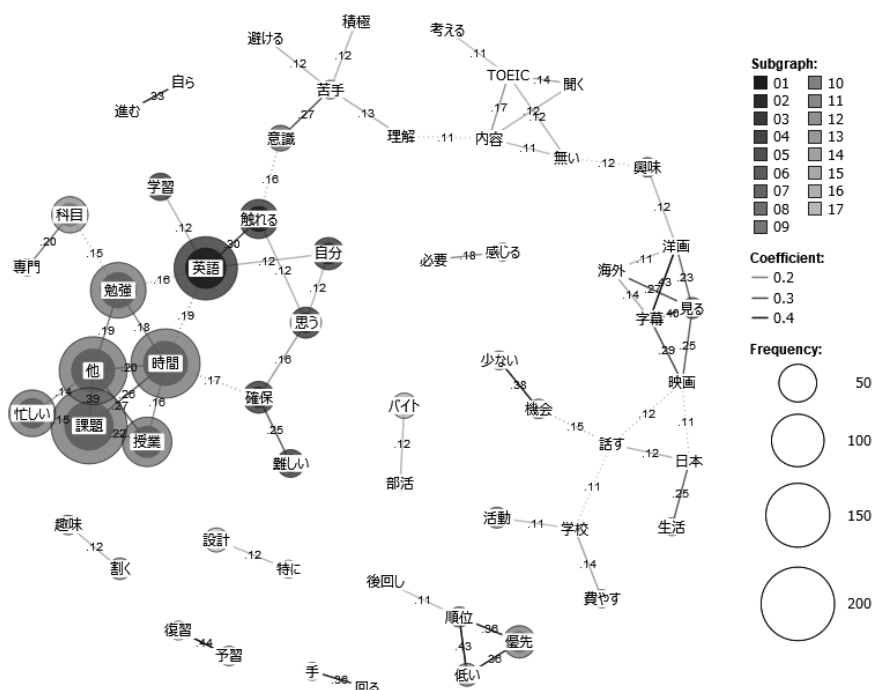


図 20 英語に触れる時間が十分に確保できない理由の共起ネットワーク

4. まとめ

日本において「理系」特に工科系の学生は英語が苦手だといわれているなか、本学においては約半数もの学生が英語に対して好意的な意識を持っていることがわかった。また、英語の必要性を認識し、在学中に海外渡航をしたいと考えているものの、実際は大学の英語以外の科目の課題などに追われ、学生が自分で思うよりも英語に触れる時間が十分でない様子も窺える。英語学習に対してある程度はモチベーションがありながらも、それが実際の行動にまで結びついていない問題点も明らかになった。

今後は、今回のアンケート調査で得られた結果にさらに分析を重ね、授業計画や教材改善を図るだけでなく、学生が英語に触れる機会を増やす環境づくりを心がけたい。

謝辞

本学教育開発センターの鈴木一徳先生にはアンケートで得た大量のデータの処理に関して多大なご助言・ご助力をいただきました。また国際キャリア科の秋本隆之先生、教務課の古内潤一様にはアンケートの分析に必要となるデータをご提供いただきました。そして、本学で Basic Academic English I をご担当くださっている非常勤講師の先生方には、アンケートの実施においてご協力をいただきました。ご助力を賜りありがとうございます。

注

- 1 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会「英語活用実態調査 学校（大学・高等学校ほか）2019」(https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/lr/katsuyo_2019/pdf/katsuyo_2019_school.pdf 閲覧日：2021/07/14)
- 2 同上「PROFICIENCY SCALE」(https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/lr/pdf/proficiency.pdf 閲覧日：2021/07/14)
- 3 樋口耕一「計量テキスト分析および KH Coder の利用状況と展望」『社会学評論』68 巻 3 号、2017 年、pp.334-350。
- 4 「伸びる」「良い」といった語は、アンケート結果では「伸びない」「伸びなかった」「伸びにくい」、「良い成績じゃなかった」「良い思い出が無い」といった否定語と共に使われていた。しかし、「伸びなかった」のような否定語を伴う表現は、共起ネットワーク生成に先立って「伸びる」「ない」「た（過去）」のように形態素レベルに分解される。そして共起ネットワークを作成する際には、否定接辞や助詞といった機能語は分析対象とならず、名詞や動詞などの内容語のみが抽出される。
- 5 Zoltán Dörnyei and Stephen Ryan, *The Psychology of the Language Learner Revisited*, (New York: Routledge, 2015), pp.72-105.

参考文献

- 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会「英語活用実態調査 学校（大学・高等学校ほか）2019」(https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/lr/katsuyo_2019/pdf/katsuyo_2019_school.pdf 閲覧日：2021/07/14)
- 同「PROFICIENCY SCALE」(https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/lr/pdf/proficiency.pdf 閲覧日：2021/07/14)
- 樋口耕一「計量テキスト分析および KH Coder の利用状況と展望」『社会学評論』68 巻 3 号、2017 年。
- 同『社会調査のための計量テキスト分析——分析内容の継承と発展をを目指して』第2版、ナカニシヤ出版、2020 年。
- Dörnyei, Zoltán, and Ryan, Stephen, *The Psychology of the Language Learner Revisited*, New York: Routledge, 2015.

Appendix

アンケート質問項目

1. あなたは英語が好きですか？
2. 1で「好き」または「どちらかといえば好き」を答えた人は、英語が好きな理由を回答してください。
3. 1で「嫌い」または「どちらかといえば嫌い」と答えた人は、英語が嫌いな理由を回答してください。
4. 大学で英語の力を伸ばしたいと思いますか？
5. 4で「伸ばしたい」と答えた人は、その理由を回答してください。
6. 4で「伸ばしたくない」と答えた人は、その理由を回答してください。
7. 4で「どちらでもない」と答えた人は、その理由を回答してください。
8. あなたは英語のどの分野が最も得意だと思いますか？
9. あなたは英語のどの分野が最も苦手だと思いますか？
10. あなたは在学中に英語のどの分野を最も伸ばしたいと思っていますか？
11. あなたはこれまでに海外に行ったことはありますか？
12. 11で「ある」と回答した人は、行ったことのある国を教えてください。
13. COVID-19の感染拡大が治るなど環境が整えば、在学中に海外に行ってみたいと思いますか？
14. 13で「はい」と答えた人は、その理由を回答してください。
15. 13で「いいえ」と答えた人は、その理由を回答してください。
16. COVID-19の感染拡大が治るなど環境が整えば、工学院大学で実施されているハイブリッド留学や語学研修に参加したいと思いますか。
17. 16で「ハイブリッド留学に参加したい」または「語学研修に参加したい」を選択した人は、その理由

を回答してください。

18. オンラインでの語学研修に参加したいと思いますか？
19. 18で「はい」と答えた人は、その理由を回答してください。
20. 18で「いいえ」と答えた人は、その理由を回答してください。
21. 大学での授業時間を除き、1週間に平均してどれくらい英語に触れていますか？
22. 大学での授業以外で、どのように英語に触れていますか？（複数回答可）
23. 21および22について、自分では英語の触れる時間が十分に確保できていると思いますか？
24. 23で「思わない」と答えた人は、十分な時間の確保が難しい理由を回答してください。

（やまだ ともみ 教育推進機構 国際キャリア科 助教）

